

## 中谷先生が書かれた『硝子の壁』の顛末\*

菊地 勝 弘\*\*

### 1. はじめに

2000年は中谷吉郎先生の生誕100年ということで、「日本雪氷学会」や、「中谷吉郎雪の科学館」を通していくつかの企画が行われた。これを機に私は、中谷先生や雪に関してのこれまでの疑問点のいくつかをはっきりさせることに努めてきた。その1つは「初めて人工雪を作った2人のS君」と言われてきた、「佐藤磯之介」さんと、「関戸弥太郎」さんの、どちらが本当に初めて人工雪を作ったのかを資料を基にして、それが「佐藤磯之介」さんであり、その生涯についても述べてきた(菊地, 2001)。また『雪の研究』(中谷, 1948)や『Snow Crystals』(Nakaya, 1954)に出てくる「K. Nakata」、つまり当時の南樺太(現在のサハリン)で、複雑な外形をした側面結晶(現在では交差角板)の顕微鏡写真撮影に成功した「中田金市」さんはどのような人であり、どうして写真撮影が出来たのか。また、中谷先生と、どのような関係があつて、先生の手元に写真が渡ったのかも明らかにした(菊地, 2001)。

2001年には1月から3月にかけて、東京都渋谷区猿楽町「ヒルサイドパレス」で『科学の心と芸術<中谷吉郎:一人の科学者>展』をコンセプトにした展示会が開催された。この企画が具体化し始めた頃の2000年11月、私は先生の次女である中谷英二子さんから1通の手紙を受け取った。それは、先生が私に書いて下さった『科学と芸術との間には硝子の壁がある』についてのものだった。

### 2. 中谷英二子さんからの手紙

英二子さんからの手紙は大凡次のようなものであった。2001年1月から始まる企画テーマを『科学の心と芸術』としたことで、かつて私が大学院生だった頃の恩師の1人である、樋口敬二先生(現:名古屋大学名誉教授、中谷先生の最後の愛弟子)を通して中谷先生と約束し、先生の著書の内から持参した3冊内の1冊『寺田寅彦の追想』(中谷, 1947)の見開きに書いていただいた、「科学と芸術との間には硝子の壁がある」(菊地, 2000)(第1図)が、今回のコンセプトにピッタリだというのである。それで、目下、額に入れて私の書斎にあるものを展示するため貸して貰えないか。もう1つは、一体どんな状況下でその言葉を書いたのか? それについての先生のコメントは無かったのかどうか? また、菊地さんはそれをどのように解釈されているのでしょうか? というものであった。

### 3. 都竹一衛氏からの手紙

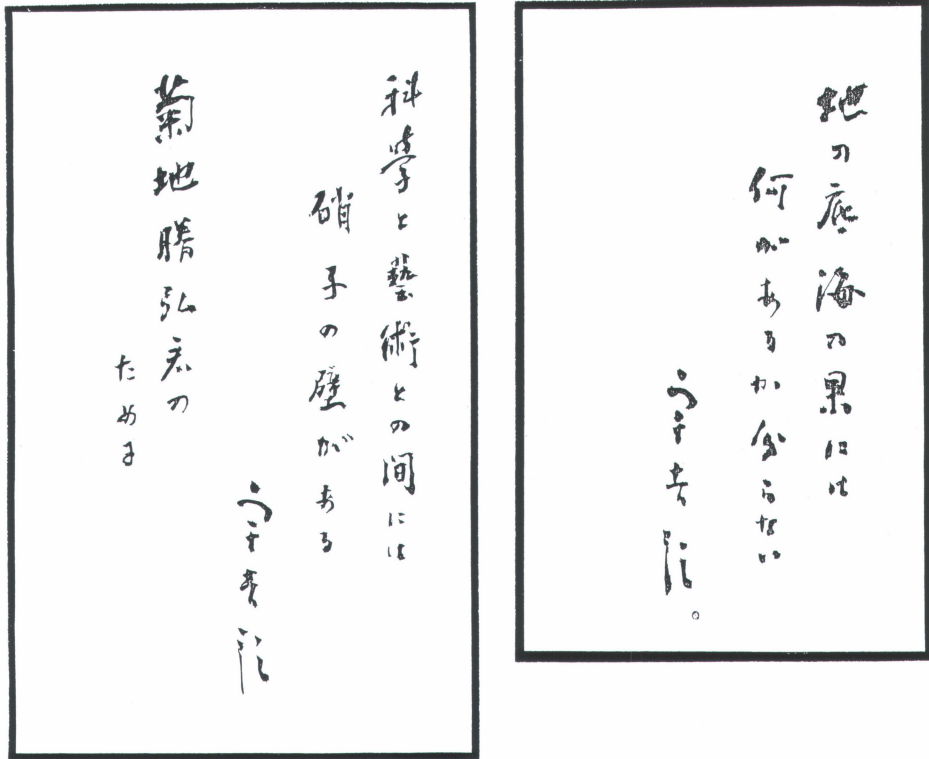
1986年1月、私たちのグループは当時の文部省科学研究費国際学術研究海外学術調査の一環として、カナダ北極圏のイヌビク(68°22'N, 132°42'W)で「低温型雪結晶と極域エアロゾルの研究」の現地観測を行っていた。1月8日はそれまでの寒気が去って一転して地上の最高気温は-19°C、雲層内の温度は-13~-18°Cを記録するほど現地では暖かい日で、低温型雪結晶を期待している私たちにとっては、温度から予想される樹枝状結晶に、今日は実質的には開店休業だなーと考えながら顕微鏡を覗いていた。そんな時、私は突然「あー」と息を飲むと同時に、「十八花だー」と大きな叫び声をあげた。隣で雪のレプリカ作りをしていた秋田大学の梶川さんが驚き、怪訝な顔をしていた。数枚の写真を速写して、すかさず私は、そんな彼に早く顕微鏡を覗くように促した。そして、嬉しさのあま

\* The Circumstances of a Phrase written by Prof. U. Nakaya.

\*\* Katsuhiko KIKUCHI, 秋田県立大学生物資源科学部。

kikuchi\_snow@akita-pu.ac.jp

© 2002 日本気象学会



第1図 中谷宇吉郎先生が著者に書いて下さった「地の底 海の果」と「硝子の壁」。

り観測室に使用させて貰っているイヌビック科学研究センター (Inuvik Scientific Research Center) の裏手にある格納庫内を厚い防寒服と重い防寒靴という出で立ちで白熊のように動き回っていた (Kikuchi, 1987; Kikuchi and Uyeda, 1987) (第2図)。

帰国して直ぐに、“初めての十八花結晶”として、1986年2月28日の北海道新聞の記事になった。それから暫くたって、私の研究室に1冊の書籍小包が届いた。送り主は、私には面識のない北海道旭川市在住の都竹一衛氏で、中には手紙と一緒に道内俳誌2種と全国俳誌の3冊が入っていた。氏は俳号を呼句郎といい84歳の高齢にもかかわらず、同人誌を主宰しこの分野では著名な方であった。氏は新聞紙上の十八花の結晶を見て句を作り、俳誌に掲載されたものを送ってくれたのであった。その内のいくつかを紹介すると、次のようなものがある。

- ・昇華いと神秘の極み雪花咲く
- ・十八花奇しくも凝りて雪華燦
- ・自然美の極み雪華の截然と
- ・巧まざる雪華十八の箭のごとく



第2図 カナダ北極域のイヌビックで観測された十八花結晶 (Kikuchi, 1987)。

などである。

私は彼が送ってくれたこれらの句から咄嗟に、これまではっきりした答えが見出せないでいた、中谷先生が書かれた「科学と芸術との間には硝子の壁がある」というのは、ひょっとするとこういうことなのだろうと思った。そして、当時私も執筆を担当していた北海道新聞の「オーロラ」に早速「硝子の壁」というコラムを書いた。

その後、しばらくの間「硝子の壁」については、特に考えることもなかった。しかし、講演や中谷先生についての話題が出た時には、「硝子の壁」と一緒に書いていただいた「地の底 海の果には何があるか分からない」(第1図)という言葉を必ず引用していた。しかし、「硝子の壁」の意味するところは?と問われると、明解な答えを出せず、各個人によって如何様にも考えられるのでは?また、考えていいのではないのでしょうか?と答えてきた。

2000年春の日本気象学会総会で、思いがけず学会の功績賞に相当する「藤原賞」の受賞の栄に与った(菊地, 2001)。受賞講演では、当然のこととして「地の底海の果」と「硝子の壁」の言葉を使わせて貰った。講演後の質問で、講演担当理事から「硝子の壁」はどのように考えればよいのか?という質問があった。その時の答えも、前と同じような答えにならないような答えにしていた。

そして、今回の芙二子さんからの質問である。それに対する回答の状況は変わらなかったが、しかし、そのままにしておく訳にも行かず、またも答えにならないコメントを送るしかなかった。

#### 4. 再び「硝子の壁」

中谷先生の生誕100年を記念しての中谷宇吉郎全集8巻(岩波書店, 2000-2001)が刊行されて間もなく、編集担当者から、中谷先生に関する事なら何でも良いからと、全集に付随して発行されている月報の執筆依頼を受けた。私は孫野長治先生(初代の北海道大学理学部地球物理学教室気象学講座担当で中谷先生の愛弟子の1人)の最初の学生ではあったが、中谷先生の直弟子ではなかった。しかし、当時の理学部物理学の中谷教室には1人も大学院生が居なかったこともあって、欧文雑誌の輪講は、中谷、孫野両教室が合同で行っていたという事情があった。中谷先生は外国出張が多くて、毎週1回行われていた輪講にも数えるくらいしか出席されなかった。

中谷先生も孫野先生も輪講時の座席は決まっていた、中谷先生は発表者の右斜め脇に、孫野先生はその左隣りであった。私の発表当日、中谷先生は何か張り切って居られるようで、恐ろしいような雰囲気を感じさせ、何を質問されるか分からない不安に駆られていた。1時間の発表の半ばで、自分でも良く分からないことを言ったなと思う間もなく、中谷先生は私が紹介している雑誌をさっと取り上げ、今君が紹介した文言はどの当たりに書いてあるのかね?と言われて心臓が止まる思いをした。

また、東 晃先生を隊長とした第1回北海道大学アラスカ・メンデンホール氷河調査隊に参加した時、氷河末端のベースキャンプを慰問に訪れ、東京出発時に陣中見舞いのために購入された折り詰めを持ち上げられ「これはね、君、明日出来た江戸前なんだよ」と製造月日を示しながら得意そうに言われて隊員を笑わせ、そして鼓舞された。

先生が亡くなられる前年に、先生が北米北極研究所(Arctic Institute of North America: AINA)から依頼されたプロジェクト研究としての、厳冬期のアラスカ州とカナダの国境付近にあるピーターズ湖の湖水調査の話があった。当時博士課程1年目の私に、「君1人で行って見ないか?」と言われ、即座に「ハイ」と答えたものの、翌日、「とても僕1人では無理です」と小さくなってお断りに行った時、「そうだね、これは君1人では無理な話だね。」と言われて、ニッコリされた。先生のこのような厳しさと温かさとユーモアさを持ち合わせたことなどを書こうと思ったりしたが、結局「硝子の壁」というタイトルを再び選ぶことにした。

数ある中谷先生の著書の中に「硝子の壁」というタイトルの随筆はない。とうとう私なりのずばり答えにならない答えに行き着くプロセスなどを書こうと考えていた矢先、偶然、寺田寅彦全集(1996-1999)の月報10(津田, 1997)に、「これだ!」と思われる文章を見つけることが出来た。

それは次のようなものであった。

「寺田さんの物の見方はなんでも、すぐに裏側をはぐって見、未だそれでも満足ができぬので縦横十文字に、四方八方から見ると、そこに科学者らしい値うちがあるんだらうが、然し、又自分の専門の話になると散々愉快そうに話して、物理だって客観的に調べれば能がないので、矢張り芸術文学同様人間の頭脳に創作的なひらめきがあって、そこからヒントを得て演繹しなければ大きな発見や、発明はできない、

と言うようなことも言って居られた。」と言う文章である。

寺田先生が身近な人に度々言ったであろうこの言葉を、中谷先生は私に「科学と芸術との間には硝子の壁がある」と言う言葉で表して下さったのではないだろうか。だって、中谷先生は、私が持参した3冊の随筆集、『寺田寅彦の追想』（中谷、1947）、『イグアノドン の唄』（中谷、1952）と『黒い月の世界』（中谷、1958）の内の『寺田寅彦の追想』に書いて下さったのだから、私のこの推論は、月報をみた美二子さんにも受け入れられるところとなった。

これでやっと、心の中のモヤモヤが吹き飛んだような気がして一寸嬉しくなった。

寺田寅彦と津田青楓画伯との関係はと言えば、極めて親密で、よくご一緒していたようである。例えば『寺田寅彦の追想』（中谷、1947）には関東大震災の時の出来事が載って居るが、それによると、「…丁度あの地震の時に、先生は二科展へ行って居られた。津田青楓さんと喫茶店で休んで居ると、突然地震があった。「大分大きいので、すぐこれは大変だと思ったね。部屋の天井の隅のところが、柱がくっついたり離れたりするので、かういう木造建築では駄目だと思ったよ。やっとおさまって気が付いてみたら、誰も他のお客が居なくてね皆機敏に逃げ出しているのさ。ボーイも居ないので、やっと呼び返して金を払って帰ったが、あのボーイはきつと間抜けた爺いだと思っていたらうね」という話なのである。この本の見開きには津田画伯による寺田先生の人物像のスケッチが載っている。また、岩波書店から発行された寺田寅彦全集第8巻（1997）は、「寅彦と絵画」を特集したもののだが、最初のエッセーが「津田青楓君の画と南画の芸術的価値」の題目で、寅彦の最初の絵画論が掲載されている。これに続く二科会関連のエッセーのいずれにも、津田青楓の名が出てくるほどの惚れ込みようだった。2人はそんな関係であったのである。と言うのも彼等は同じ夏目漱石門下生であったからであろう。

### 5. 樋口敬二さんからの手紙

中谷吉郎選集第3巻が刊行されてから間もなく、樋口敬二さんから1通の手紙が届いた。何事かと思いきや、月報3の私説「硝子の壁」を読んで、早速、樋口さんの私論が寄せられたのだった。

樋口さんは、寺田寅彦の随筆集『柿の種』（1933）のコピーを同封された上で、「硝子の壁」は、ずうっと『柿

の種』に由来すると信じていたらしいのだが、それは「柿の種」の中に見られる「日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、ただ1枚のガラス板で仕切られている」のフレーズである。しかし、樋口さんは、私の推論の1つである「硝子の壁」が、持参した3冊の随筆の中の『寺田寅彦の追想』に書かれているところを見ると、「硝子の壁」のフレーズは、君の言うとおりのかもしれないね、と言うのである。

### 6. 寺田寅彦の『萬華鏡』

寺田寅彦の随筆集の1冊に『萬華鏡』（1935）があり、その2番目の随筆が「科学者と芸術家」である。その中で、寅彦は常に「科学者の天地と芸術家の世界とはそれ程相容れぬものであろうか」を考え、これは、自分の年来の疑問であると書いている。そして、旧制熊本五高で英語を習い、実質的な俳句の先生でもあった夏目漱石が、何かの講演で、「…科学者と芸術家とは、其職業と嗜好を完全に一致させ得るという点に於て共通である…」という意味の講演をされた事があると記憶している。…（略）…更に続けて、「芸術家と科学者が、それぞれの製作と研究とに没頭して居る時の特殊な心的状態は、其間に何等の区別をも見出し難い様に思はれる。」…（略）…とも書いている。

さらに、「…しかし科学者と芸術家の生命とする所は創作である。他人の芸術の模倣は自分の芸術でないと同様に、他人の研究を繰返すのみでは科学者の研究ではない。…（略）…科学者の研究の目的物は自然現象であって其中に何等かの未知の事実を発見し、未発の新見解を見出さうとするのである。芸術家の使命は多様であろうが、其中には広い意味に於ける天然の事象に対する見方と其表現の方法に於て、何等かの新しいものを求めようとするのは疑もない事である、…」としている。つまり、寺田寅彦は常に「科学（者）と芸術（家）」の相補性を心のどこかに置き、思考し、また言葉を変えて表現していたものと考えられるのである。

### 7. おわりに

「硝子の壁」の言葉は、勿論中谷先生のオリジナルなのだけれども、私の推論は、津田画伯による寺田先生がよく口にしたと言われる物の見方に関する文章と、それが『寺田寅彦の追想』に書かれたと言うことに起因している。しかし、「硝子の壁」の言葉が他に1つもないこと、そして、津田画伯に常々言っていたという

言葉も、ずばり「科学と芸術との間には硝子の壁がある」という言葉ではない。そんなことを考えると、『柿の種』に書かれた寺田寅彦の言葉も、『萬華鏡』に見られる夏目漱石の講演からの科学者と芸術家の本質についてを、年来の疑問として推敲されたことから、寺田寅彦の考え方も、本を正せば夏目漱石に深く関わっていることは間違いない。結局は、五十歩百歩ということなのかもしれない。それらを敢えて纏めるとすれば、「科学者が思考し、作り上げる理路整然とした論理体系と、芸術家が創造する美的感覚、表現とは、その未知の発見、美しさの過程において相補性、つまり、共通のものだ。」と言えるのではなかろうか。とすれば、『科学と芸術との間には硝子の壁がある』は、ものの見方を問うたものとしてやはり、各個人が、その場その時の状況に応じて考え、感じて良いということになるのではなかろうか。中谷先生はきっと、『そうなんだよ、菊地君、それでいいんだよ』と言って下さるのではないだろうか？ 『硝子の壁』問答は、取りあえずこれで終止符を打つことにしよう。

#### 参 考 文 献

菊地勝弘, 2000: 硝子の壁—中谷先生との出会い—, 中谷吉郎集第3巻, 月報3, 岩波書店, 4-6.

- 菊地勝弘, 2001: 人工雪を作った二人のS君, 雪氷, 63, 397-401.
- 菊地勝弘, 2001: 極域における雲物理学研究, —「地の底海の果」と「硝子の壁」—, 天気, 48, 723-745.
- 菊地勝弘, 2001: U. Nakaya の Snow Crystals (1954) にでてくる K. Nakata, 雪氷, 63, 518-523.
- Kikuchi, K., 1987: The Discovery of Eighteen-Branched Snow Crystals, J. Meteor. Soc. Japan, 65, 309-311.
- Kikuchi, K. and H. Uyeda, 1987: Formation Mechanisms of Eighteen-Branched Snow Crystals, J. Fac. Sci., Hokkaido Univ., Ser. 7, 8, 109-119.
- 中谷吉郎, 1947: 『寺田寅彦の追想』, 甲文社, 319pp.
- 中谷吉郎, 1949: 『雪の研究』, 岩波書店, 161pp, 付録17, 図版319.
- 中谷吉郎, 1952: 『イグアノドンの唄』, 文芸春秋新社, 342pp.
- 中谷吉郎, 1958: 『黒い月の世界』, 創元社, 223pp.
- 中谷吉郎, 2000-2001: 中谷吉郎集全8巻, 岩波書店.
- Nakaya, U., 1954: Snow Crystals—natural and artificial—, Harvard Univ. Press, 510pp.
- 寺田寅彦, 1933: 『柿の種』, 小山書店, 224pp.
- 寺田寅彦, 1935: 『萬華鏡』, 岩波書店, 225pp.
- 寺田寅彦, 1997: 『寺田寅彦全集第8巻』, 岩波書店, 424pp.
- 津田青楓, 1997: 『寺田寅彦全集第10巻』, 月報10, 7-8.